

両ダンゴの浅ダナ釣り

(タナ1m前後)

●寄せながら釣っていくパターン

ガッテン400cc+GTS400cc
水200cc



+



+



●作り方

「ガッテン」と「GTS」をボウルに入れ、そこへ水を注いでかき混ぜる一緒練り。20～30回、しっかりかき混ぜ、最後に少し押し練りを加えて打ち始める。少しずつ練りを加えていくほうが良い。

●特徴

まとまりがよいエサなので、エサの芯が比較的でやすい。手触りは粘った感じがあるが、水中に入ると糸を引くようにバラけてくれる。セミカツケから1.5mくらいのタナまでオールマイティーに使えるエサだ。

●使い方のコツと手直し

少しずつウキのなじみ幅を目安に変化させていく。変化とは、手もみを加えたり、大きさを変えていくことだ。

ダンゴエサは、水中で溶けてなくなっていくもの。だから、寄せながら食わせるという釣りができるのだ。このエサは寄せについては、何の問題もないので、あとはいかに、ハリにしっかり残すかを考えて釣っていくこと。持ちが悪ければ練っても大丈夫なエサなので、練り込んで使ってみよう。それでもダメなときには、「グルバラ」や「ダンゴの底釣り夏」を加えてみよう。

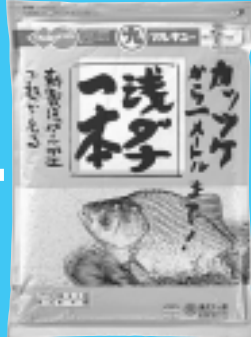


●硬めで攻めるパターン

ガッテン400cc+浅ダナー本400cc
+バラケマツハ200cc+水200cc



+



+



●作り方

一緒練りでOKのエサ。練って使っていくエサではなく、より持たせたいときには、「ガッテン」を追い足したり、「バラケマツハ」を追い足したりして、硬さで持たせて釣っていくエサだ。

●特徴

ズバリ、硬めが良い時に使っていくパターン。水面が魚で真っ黒になるときは効果的なエサだ。「ダンゴの底釣り夏」の入ったような重さのあるエサでは、魚のタナを通り越してしまうときに有効。

●使い方のコツと手直し

小エサで打ち返し、手返し良く攻めていこう。ウキがなじんでからのアタリが多くでて、力強いアタリがしぼりやすくなる。

空振りのときはエサを小さく、そしてハリスを5cm伸ばしてみよう。エサに対する心配よりも、どちらかというとセッティングに注意するパタ

ーン。

基本的に練らないで使うので、あとは圧の加減で調整していく。勘違いしてほしくないのは、しっかりとウキがなじむように圧を加える。多少の練りは、練らないという範囲内のこと。全く練らないとは違うので注意したい。

●高活性時の両ダンゴ

ガッテン600cc+ダンゴの底釣り夏 200cc+水200cc



+



+



●作り方

一緒練りでOKのエサ。最初に必要以上に練ってしまうと、その後でさらに粘りが出してしまうので注意したい。時間が経つとともに変化していくエサなので、小出しにしながら使うのがコツだ。

●特徴

このエサは、魚の活性が良く、水面に魚が黒く、またはバシャバシャとさわいているようなときに使っていきたい。エサの寄せ、重さ、持ちと三拍子そろったパターンなので、タッチの硬軟を探る楽しみのあるエサだ。

●使い方のコツと手直し



最初のアタリを逃しても、その後、1～2度、場合によっては3度とアタリ返してくるぐらいのエサ持ちが良いエサ。付けやすく、ハリからもバラバラとバラけるタイプ。だから、魚が安定して型が揃ってくるのも特徴である。経時変化には「スーパーダンゴ」、「白べら」、「バラケG」を使って調整してみよう。

●エサの大きさ

実寸大



小さめ
6×9mm



通常
8×12mm



大きめ
10×16mm

●オモリ 実寸大

0.25mm厚の板オモリ

小さめ
14×20mm

大きめ
14×24mm

●釣り方のコツ

なんとと言っても、一連のウキの動きをイメージしていくのが大切だ。まず、どんなに魚が寄っても、ウキはきちんと立つようにすること。そして、ポディーとトップの接点で受けがでることだ。

アタリは、なじみ切ったところか、なじみ切ってから戻りだすタイミングで、力強い食いアタリが理想的だ。

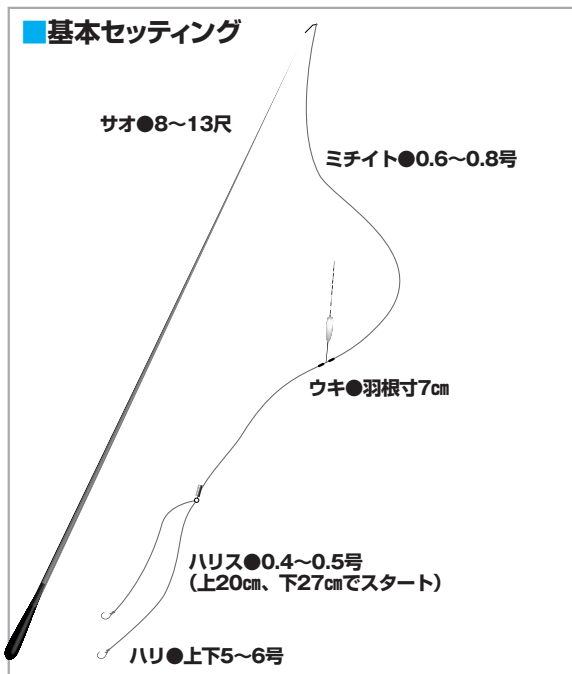
また、一度アタっても、再びアタリがでるようなエサ持ちが大切。あせらずに力強いアタリ、一番初めの力強いアタリを積極的にアワせていこう。これをアワせていくのが、速攻の釣りである。何が何でも最初にウキが動いてアワせるものが速攻ではないのだ。

釣るために一番大切なのは、ハリにしっかりとエサが付いていること。一度深なじみしたウキがすぐに上がってくるようでは、なかなか釣れません。一度なじんだら、しばらくその状態でこらえてくれるようなイメージでエサを直していこう。

●セッティングの注意点

基本的にへらを寄せながら釣っていくのだが、狙うタナ近くに多く寄せたい。盛期だと水面が黒くなるほどはしゃぐ魚がいるが、そのラインを通過できるぐらいのオモリの量が必要だ。

目安として、羽根寸7cmのウキが最近の状況にはマッチしている。このサイズのウキを使っているのにウキが入っていないようなときは、ウキの大きさを変える前に、ハリスの長さで対応していくほうが良い。



ここがポイント1 Q&A

サワリがあるのになかなか食いアタリが出ないとき

主な原因は、エサが持っていないからで
す。手軽にできる最初の動作が練ることで
すが、エサを持たせるのは、何も練って
いく方法だけではありません。粘りので
やすい「浅ダナー一本」や「バラケバイン
ダー」、または「粘力」などを足す方法
もあります。まずは、手水を付け少しづ
つ練りを加えていく。それでも持たな
いなら粘りのでるエサを足すという流
れで対応しましょう。

サワリは、アタリへと続くサインです。
このサワリをなくさないようにエサの
タッチを合わせて食いアタリへとつな
げるのが、ダンゴエサのエサ合わせの
本質です。ちょっとした大きさの違
いや圧の違いで、ウキの動きは変わ
ってきますので、こまめに、そして
丁寧に、そして丁寧に、そして丁寧に
対処してください。



ここがポイント2 Q&A

アタリがあるのに釣れないとき



力強いアタリ、つまりムズ、ズルなどでは
なく鋭いもの。これでヒットしてこないよ
うなときがダンゴエサのカラツンです。これ
に対応していくのがエサ合わせで、その順
序は、

- ① エサを付けて打ち込む前に、手水をつけてから打つ
- ② エサを小さくする
- ③ ボウルの中のエサに手水を入れていく

無意味にボウルの中のエサをいじっても
なかなか上手くいきません。エサをいじ
ると同時に、受け、サワリなどが増えた
のか、減ったのかのチェックを忘れず
に行ないましょう。これを気を付けてい
くだけで、ずいぶんと釣果は上がります。
自分の作ったエサに自信を持って攻める
のが一番です。